猿投窯製品の流通について

浅田員由

1. はじめに

我国最初の陶質土器として、5世紀に始まる須恵器の生産は、当時の支配層の政策的な意図を色濃く反映して、全国に拡散していったと考えられている。それは、当初、須恵器が権威の象徴として築造された古墳において、重要な副葬品とされたことからも窺える。おそらく、伽耶国等の朝鮮半島の諸国からもたらされた陶質土器は、従来の土師器と比較すれば、このうえない宝物であった。ましてや、その貴重品である陶質土器の生産を掌握することは、それをもたない豪族より遥かに優位に立つものであったに違いない。

これまで、須恵器は、陶邑窯から一元的に全国に拡がったと考えられていたが、最近では、朝鮮半島の陶質土器の比較等によって、多元的な発生を示していることが明らかとなってきた。これはまた、当時の我国の権力が、絶対的に統一されたものではなく、各地に半ば独立した王権の存在していたことを物語るものであった。この意味において、須恵器の生産は、まさに政治的な産物であり、その技術の伝播や製品の流通も、きわめて政策的な意図によって行われたであろうことは容易に理解できる。

尾張国においては、5世紀後半、名古屋市東部の丘陵地（東山地区）に、この地域最初の須恵器窯が築かれた。この時期は、大和王権が、朝鮮半島の権益を激しく主張する一方、国内の統一をめざしていた時である。大和王権は、統一国家への過程の中で、国家体制の整備を始めていた。陶質土器の生産技術の導入も、百済や新羅と対抗する国家の成立を意図したものであろう。こうして始まる須恵器生産が、国内でも早い段階に、名古屋市東部丘陵で開始されるのは、大和王権と尾張国の密接な関係を示すものといえる。事実、これ以降、律令制の確立に至る時代、尾張国は大和王権において重要な位置を占めるのである。特に、ヤマトタケルの伝説に象徴されるように、大和王権の東国伸張に関しては、その前線基地ともなったのである。尾張国の須恵器生産は、この代償として、大和王権の技術分与によって始められたものと考える。それはまた、古代を通じて一貫した、この地域の窯業の性格でもあった。

尾張国の初期の須恵器生産は、尾張国造である尾張氏によって掌握されていた。このことは、尾張氏の墳墓とされる、尾張国最大の古墳である断夫山古墳に、東山地区で生産された円筒埴輪が使用されていることからも明らかである。尾張氏は、この断夫山古墳築造の段階で、尾張全域を支配する勢力となったと考えられており、その一端は大和王権との密接な関係に支えられていると思われる。この断夫山古墳の近辺は、弥生時代の大規模遺跡が集中し、古墳の密度も高く、また尾張氏の氏神を祀る熱田社も位置しており、まさしく尾張氏の本拠地にふさわしいところである。尾張国最初の須恵器窯は、ここから直線距離にして7～8㎞の東山丘陵に築かれたのである。

東山丘陵に築かれた初期須恵器窯は、円筒埴輪を焼いており、周辺の古墳に供給していた。これらの古墳の被葬者は、尾張氏の系譜に連なる豪族で、須恵器という新しい器物の共有によって、同族の意識を強固にするものであったと考えられる。しかし、当初は貴重品として古墳に副葬され、祭祀の供献に使用された須恵器も、次第に日常の生活用品となり、需要は増大していった。

こうした需要を充すため、東山地区で始まった須恵器窯は、更に東方や南方の丘陵地に展開していった。これが、古代最大の窯業地として発展する猿投窯の始まりである。

2. 猿投窯の展開

須恵器の流通は、基本的には小地域に限定されている。それは、須恵器生産が地域豪族の家内的生産によるものに他ならないからである。しかし、こうしたなかで、次第に大生産地に発展していく須恵器窯が現われてきた。大和王権の根拠地である陶邑窯を別格として、備前や筑前、讃岐、美濃等の窯業地である。これらの産地で生産された須恵器は、貢納という形態で広く流通するようになった。特に、律令制が浸透し、貢納体制が確立すると、特定地域の須恵器生産は、ますます拡大していった。その中で、猿投窯は他の須恵器窯と異なる展開を遂げていくのである。

尾張国における須恵器生産には、猿投窯の源流となる東山窯の他に、尾北窯がある。現在の春日井市から小牧市にかけての丘陵に拡がる尾北窯は、他地域の須恵器窯と比較しても充分大きな生産地である。尾北窯の所在する尾張北部は、犬山市の東之宮古墳や青塚古墳など、畿内型の大形古墳に象徴されるように、早くから大和王権の影響下にあったと考えられている。この勢力は、尾張氏が尾張国造となる段階で、丹羽県主の伝承として残る地域勢力となっていた。しかし、尾北地域は、大和王権の制約によって、丹羽県主を始めとして大勢力が育たず、また、尾張氏の浸透も緩やかであったと考えられる。このことは、尾張国の古代寺院のあり方からも推測される。

尾張国における白鳳期から奈良時代にかけての寺院跡の所在は、きわめて偏った分布を示している。それは、この時期の古代寺院は、尾張北部に圧倒的に多く、尾張氏の本拠地と目される尾張南部に数ケ寺が知られるだけであることである。弥生時代以降の農耕の発達や古墳の築造等、基本的な生産構造を比較しても、寺院の建立にこれだけ差異がでるということは、それがきわめて意図的であるからに他ならない。このことは、尾張国の成立にかかわることで簡単には論じられないが、尾張北部の地域は、大和王権を代行する国衙の権威によって、小豪族が尾張氏から自立し、寺院を建立するに足る経済力を蓄えていたことを示すものといえよう。一方、尾張南部は、尾張氏の本拠地でもあり、尾張氏の直接支配が貫徹しているため、寺院を建立できる力をもった豪族の自立を認めなかったことをおもわせるのである。逆にいえば、尾張氏は、尾張南部への大和王権の介入を排除し得るほど強大な支配力を及ぼしていたということであろう。

こうしたことからみて、尾北窯は国衙の権威によって維持された窯業地といえる。それは、尾北窯で生産された瓦が、尾北地域の広い範囲の小寺院に供給されていることからも窺える。つまり、これらの小寺院を建立する小豪族の力では、単独に須恵器窯や瓦窯をもつことができず、必要な瓦や須恵器の供給は、国衙によって維持された尾北窯に頼ったのである。これに対して、東山窯は、尾張氏の私的な生産としての要素の強いものであった。このことは、東山窯が次第に発展し、猿投窯を形成する上で重要な意味をもっていたに違いない。

3. 猿投窯の転換

猿投窯は、奈良時代後半から平安時代初期にかけて転換期を迎える。それは、この時期に、我国最初の高火度焼成による施釉陶器である、灰釉陶器を生み出したことである。このことによって猿投窯は、他の須恵器生産地と隔絶した窯業地へ発展する。

唐三彩を模した特殊な施釉陶器である、奈良三彩を除けば、猿投窯の灰釉陶器は、我国最初の施釉陶器である。それでは、猿投窯で灰釉陶器が生まれる時点で、それに匹敵する須恵器窯は、陶邑窯始め決して少くなかったはずであるが、何故猿投窯にだけ、灰釉陶器の生産が可能であったのであろうか。勿論、結果的にみれば、良質な陶土が豊富に存在したという自然条件もその一つであるが、初期の灰釉陶器が、それほど良質の陶土を必要としなかったことも事実である。

猿投窯で灰釉陶器の転換が始まる奈良時代後半は、中央政府の本格的な東北地方への進出が始まる時でもあった。それはまた、それまでの唐、新羅との外交を重視する政策から、内政重視の政策への転換を意味していた。それは、陶器生産からみて二つの重要な要件をもっていた。一つは、それまで輸入されていた中国の陶磁器の国産化である。今一つは、従来蝦夷として視野に入れていなかった東北地方への進出による陶器需要の増大である。つまり、灰釉陶器の生産は、技術の獲得と同時に供給体制の確立をめざすものであった。この条件を充す窯業地として猿投窯が成立したのは、尾張国という地政学的な観点からみて、きわめて妥当であろう。

中央政府の東北進出において、尾張国は後方の兵站基地の役割を担っている。これは、京都からみて尾張国が東国の入口であり、東国からみて畿内への入口であったことから当然といえる。更に、既に古墳時代から、この地域の海上交通の実権を尾張氏が掌握していたことが挙げられる。

伊勢湾の海上交通に尾張氏が大きく係わっていることは、ヤマトタケル東征の説話や持統上皇の三河行幸の記事などからも類推できる。東北遠征においては、この海上交通を利用して、大量の物資や人員が東国へ輸送されたのである。つまり、東北進出とは、別の面からみれば尾張国と東国を結ぶ輸送路の開拓でもあった。そして、この輸送路の確立こそが、猿投窯の発展の重要な要素となったのである。また、それを可能にしたのは、律令制下においても強大な権力を保持していた尾張氏の存在であった。この両者の存在によって猿投窯は、古代最大の窯業地に発展するのである。

初期の灰釉陶器が、金属器製品の写しから始まったことは、浄瓶、水瓶等の、本来金属器であるべき器種に限って施釉されていることからも明らかである。この時期、確実に金属器の碗や盤を写したと思われる須恵器が現われることから、増大する金属器の需要を、やきものによって代替させる試みが行われたことが知られる。その中で、浄瓶や水瓶のような特殊な製品が灰釉陶器として登場するのである。これらの灰釉陶器は、非常に精緻に作られ、金属器の鋭さを巧みに写しているものの、須恵器と比較して必ずしも高級品とはいえなかった。おそらく、本来の金属器製品を所有することができなかった、地方の小寺院や官衙で使用されるものであった。

同じ頃、中国から輸入される青磁や白磁の製品は、最上層階級の人々の間では、日常生活用品として使用されていた。この傾向は次第に広まり、中国製陶磁器の需要は更に増大していった。それに応えて始まったのが、青磁の国産化であった。既に、奈良時代前期に唐三彩を巧妙に写した奈良三彩の技術を確立していたことから、青磁の国産化も、それほど困難とは思われなかった。実際、その要求に応えて、越州窯青磁の碗を巧妙に写した陶器が出現している。ただ、それは青磁のような磁器質のものではなく、軟質の緑釉陶器であった。

緑釉陶器は、奈良三彩の技術で生産が可能であった。現在のところ、奈良三彩は平城京の官工房で作られたと考えられている。三彩陶器の使用が祭祀、仏事等の特殊な用途に限定されていることや、生産に高度な技術を要することなどから、それは間違いないであろう。この官工房に蓄

積された技術が、青磁写しの緑釉陶器を生み出したのである。しかし、この段階において、従来中央の官工房で独占されてきた三彩陶器の技術は、他の窯業地へも拡散していた。それが、内政重視政策の現われなのか、青磁写製品の生産が急務であったのかは不明であるが、猿投窯もその一つとして緑釉陶器の技術を導入するのである。このことによって猿投窯は緑釉陶器の生産を始めると共に、灰釉陶器の技術をも完成させるのである。

4. 施釉陶器の流通

猿投窯の施釉陶器には、緑釉陶器と灰釉陶器の二種類がある。灰釉陶器は、奈良時代中期からの金属器写しに起源をもつ、猿投窯の基本的な陶器であるが、緑釉陶器は、官工房の奈良三彩の技術を継承する、やや限定された製品であった。灰釉陶器は、金属製仏具の写しという性格から、地方官衙や小寺院を対称としたものであったことは前述のとおりである。一方、緑釉陶器は、奈良三彩の系譜に連なる高級品として、より上層階級の需要を充した。また、緑釉陶器は、京都府や滋賀県等の窯でも焼かれており、生産地は広い範囲にみられる。ただ、緑釉陶器は、奈良時代末期から平安時代初期に生産された、精緻な製品と、平安時代中期以降のやや粗質な製品があり、両者の間には断絶がみられる。

尾張国においては、猿投窯、尾北窯ともに緑釉陶器を生産しているが、その中心は前者であった。当時、国産の最高級品として考えられていた緑釉陶器が、国衙の影響下にあった尾北窯ではなく、何故猿投窯で生産されたのであろうか。

緑釉陶器の生産は、釉薬原料の入手という点から、中央の規制を免れることができないため、国衙の直営工房で行う方が容易であった。また、低火度焼成であるため、耐火度の高い陶土や高い温度の窯も必要としない。平安時代中期以降、多くの地域で緑釉が生産されるのは、焼成そのものが簡単であったことによるのであろう。勿論、猿投窯は既に灰釉陶器の焼成に成功していたわけで、技術的には他の窯業地を陵駕していたことは間違いない。これには、この時代においても厳然たる勢力を保っていた尾張氏と深く係わるものと思われる。

猿投窯における緑釉陶器の生産地は、名古屋市南部の鳴海町の丘陵地である。ここは、尾張氏の本拠地、熱田社周辺から約10㎞ほどのところである。しかも、灰釉陶器の生産からは、中心とはならない地域である。この時点において、猿投窯の灰釉陶器生産の中心地は、尾張国と三河国の境界となる境川の上流域、西加茂郡三好町福谷周辺に移っていた。良質な灰釉陶器を生み出していたこの地域ではなく、鳴海地区において緑釉陶器が始まったのは、生産技術としてよりは政策的な意図からであろう。それには、6世紀以降、この地域に根付いた尾張氏の権力を抜きにしては考えられないのである。

伊勢湾の海上交通に、古くから尾張氏が大きく係わっていることは、ヤマトタケル東征の説話や持統上皇の三河行幸の記事からも充分考えられる。この海上交通権は、律令制下においても温存され、尾張氏の権力の源となっていたに違いない。それが、奈良時代末期から平安時代初期の東北進出に、尾張国が重要な位置を占める要素でもあった。蝦夷征伐とは、別の面からみれば、尾張国と東国を結ぶ輸送路の開拓であった。ヤマトタケルの時代からみれば格段に多い兵員や物資の輸送は、安定した輸送路の確保が必要であった。貴重品とはいえ生活用品である施釉陶器の東国への流通は、まさにこの輸送路の確立の結果として現われるのである。このことからみれば、

伊勢湾から東への海上交通を掌握する尾張氏の存在は欠かせない。そして、また猿投窯の施釉陶器が全国的に流通するのは、まさにこの時期からである。

鳴海地区における緑釉陶器は、越州窯青磁を忠実に写したものが多く、その代替品として始まった。一方、灰釉陶器が、金属器の代替品であったことは前に述べた通りであるが、緑釉陶器の出現する時期、灰釉陶器も青磁写しを始める。しかし、当時の技術では青磁を焼くことは困難で、それほど品質の良い製品ではなかった。その出土の傾向をみても、緑釉陶器が官衙や寺院に限られているのに対し、灰釉陶器は、より広い範囲から出土している。このことからも、緑釉陶器が灰釉陶器より高級品であったことが知られる。この両者が、尾張氏の本拠地近くで生産され、東国へ広く流通しているのである。

5. 東海道における施釉陶器の流通

尾張国から東国への経路には、官道としての東海道と東山道が知られている。東海道については、正規な交通路は当然陸路であるが、海上交通も利用されたであろうことは確かである。特に、伊勢湾から三河湾にかけての地域は、海上交通が盛んであったことが知られている。その拠点の一つが、尾張氏の本拠ともいえる熱田社近辺であった。尾張国から東国への最初の地域となるのが三河国である。

三河国は、践祚大嘗祭への陶器貢納国である。延喜式の記載がどの程度実状を反映していたものかは不明であるが、少なくとも平安時代前期には、三河国は和泉国や備前国と同様の須恵器生産国として知られていたのである。三河国における須恵器生産は、尾張国との境界に近い、現在の刈谷市北部に所在する、井ケ谷窯と豊橋市東南部の一里山古窯の二ケ所が知られている。一里山古窯は、7～8世紀代に操業されており、律令制初期の三河国の貢納陶器を生産したのは、この窯である。しかし、平安時代初期、猿投窯で灰釉陶器の生産が活発化する頃、一里山窯は生産を停止する。井ケ谷窯は、この時期から生産を増大するのである。つまり、平安時代初期には、三河国の陶器生産の主体は、猿投窯に含まれる、尾張国との境界に位置する井ケ谷窯に移るのである。この、三河国の東端から西端への陶器生産の移動は、まさに猿投窯の影響に他ならない。おそらく、三河国では、猿投窯からもたらされる灰釉陶器への依存度が高まり、やがて国内での生産が始められたものであろう。このことから、延喜式に記載された時代の貢納陶器は井ケ谷窯で生産されたことが知られる。

井ケ谷窯は、尾張、三河両国の境界である境川の左岸にあり、南へ5㎞ほどで、東海道の名所、八ツ橋である。また、境川を7～8㎞下れば衣浦湾となり、三河湾に続いている。このことから考えれば、井ケ谷窯の製品は、三河湾の海上交通を利用して、国衙まで運搬された可能性が高い。そして、境川の上流に位置する、猿投窯黒笹地区の製品も、そのルートに乗ったものと思われる。

猿投窯で生産された灰釉陶器は、境川を経由する三河湾の海上交通によって三河国内に広く運ばれ、更に豊川の左岸、飽海渡で陸路に接続して、遠江国へ運ばれたのであろう。平安中期以降、再び豊橋東南部地域に灰釉陶器窯が成立するのは、この陶器運搬の交通路の確立によるところが大きいに違いない。この地域の灰釉陶器の所在する、大岩山から二川にかけては、飽海から遠江国へ抜ける交通路となっている。それは、製品の伝播と共に灰釉の技術も、この交通路によって運ばれたことを想像させる。ただ、この地域の灰釉陶器は、猿投窯ほど大規模に発展することな

く、やがて渥美窯に代表される中世窯へ転化していった。

遠江国以東における初期の緑釉陶器や灰釉陶器の出土は、官衙や寺院に限られている。その中で、蔵骨器に利用された短頸壷がやや特殊な例としてあげられる。

蔵骨器としての短頸壷は、奈良三彩陶器にみられるように、奈良時代中期には一部の階層で使用されていた。猿投窯では、奈良時代末期には、鮮やかな灰釉を施した短頸壷が作られており、畿内から関東にかけての地域で、蔵骨器として使用されている。しかし、畿内では、高級品として金銅製容器が使用されていて、灰釉陶器に対する需要は、東国に多かった。特に、上総、下総、常陸等の東海道に連なる諸国の地域から、蔵骨器としての灰釉短頸壷の出土が顕著である。

この地域の灰釉短頸壷には、奈良時代末期に遡るものがあり、火葬の風習の初期段階から、猿投窯製品が導入されていたことが窺える。それは、中央政府による関東地方の経営が確立され、東北（蝦夷）への攻勢が始まろうとする時に他ならない。この時期、中央政府は、東北地域の軍事的優位を保つため、関東の住民の移動や運備の増強を図っている時である。『続日本紀』宝亀二年に、武蔵国を東山道から東海道へ移管するという記載がある。これは、武蔵国へ行くのに、正規のルートである東山道を利用するよりも東海道を利用する者が多く、それを追認したに過ぎない。実際に武蔵国衙には東海道ルートの方が合理的であるにせよ、律令制下において公式ルートである東山道を利用しない「公使」が「繁多」であったことは、東海道の整備がかなり進んでいたことを示すものといえよう。猿投窯の灰釉陶器は、この東海道の輸送力によって広く東国一円に供給されたのである。それはまた、畿内に現われた火葬の風習が、早い時期に東国へ広まる契機ともなった。火葬の蔵骨器に灰釉短頸壷を使用することは、平安中期には更に広がり、関東一円での出土がみられる。

6. 東山道による流通

尾張国から東国への今一つの交通路として、東山道がある。東山道は、美濃国から信濃国を通る文字通りの険しい山道を主体としている。律令初期のルートは、美濃国府（現在の垂井町）から岐阜市の北方を通り、八百津町付近で木曽川を渡り、坂本駅（中津川市落合）に至り、信濃坂（神坂峠）を越えるものである。この信濃坂は、東山道最大の難所といわれている。このため、この坂を狭む美濃と信濃両国の、坂本駅と阿智駅には東山道で最も多い駅馬が置かれていた。にも拘らず、両駅の維持が困難であったほどで、この道の険しさが推し測れる。信濃側では、阿智駅から天竜川の右岸沿いに北上し、現在の高遠町から杖突峠を越えて諏訪に至る。その後大河原峠から佐久平へ出て、信濃国府（現在の上田市）を通り、唯氷坂を経て上野国へ至る、まさに山道である。しかし、平安時代には国府が、筑摩（現在の松本市）に移ることもあって、善知鳥峠から塩尻へ出て、筑摩国府を経由して保福寺峠から上田市へ抜けるようになった。また、塩尻から松本市にかけての発展は、木曽路（現中仙道）の開発に繋ったものと考えられる。

木曽路については、「続日本紀」の大宝二年（702）に「始開美濃国岐蘇山道」の記載があり、これが木曽路のこととすれば、8世紀初頭から開発が始まったことになる。しかし、木曽路の通る木曽谷は、東山道のルートである伊那谷と比較して、平担部が少なくより険岨な地域である。当然、官道として大量の輸送を支える駅家を整備することは困難であったに違いない。にもかかわらず木曽路が開発され、利用が盛んになるのは、筑摩国府を直線的に絡んでいるからであろう。

道路さえ整備されれば木曽路の方が利用価値が高かったのである。このことは、後の中仙道の設営からみても明らかである。このことは、また灰釉陶器の流通にも大きな影響を与えた。

東山道を灰釉陶器がどのように運搬されたのかは、必ずしも明らかではない。しかし、東山道に沿った各地の遺跡からは、初期の灰釉陶器や緑釉陶器の出土が顕著にみられ、猿投窯製品の流通の一端が窺える。特に、松本市や塩尻市周辺の古代遺跡からは、多くの猿投窯製品が出土しており、この地域の高級陶器の需要が少なくなかったことを示している。これに応じて大量の猿投窯製品が運搬されたことは明らかである。当然、その経路に当る東山道に沿った地域では、灰釉陶器や緑釉陶器の入手が、比較的容易であった。たとえば、伊那市の福島遺跡は、多数の平安期の住居跡が存在しているが、灰釉陶器の出土も少なくない。この遺跡は、伊那谷の要衝を占め、交通あるいは牧場の経営に関連する集落跡と考えられている。

東国（特に信濃国や甲斐国）には、官営の牧場が数多く設置され、毎年多くの産駒が、東山道を通って平安京へ運ばれた。それらの馬の大半は、伊那谷を経由している。おそらく、貢納としてではない商業活動による馬の運搬も頻繁であったに違いない。この地域の特性を考えれば、猿投窯製品の運搬にも、特産の馬が活用されたことは明らかである。福島遺跡の集落は、こうした商業活動の拠点として成立したのではなかろうか。

こうした商業活動の中から運送業者が自立し、灰釉陶器の運搬が容易になり、灰釉陶器は更に広い地域に拡がっていった。しかし、既にその主役は猿投窯から東濃窯に移っていたのである。東山道を利用するには、猿投窯よりも東濃窯の方が有利であることは明白である。特に、灰釉陶器が限られた高級品から、碗皿を主体とする日常食器へ変化すると、大量輸送が非常に重要となってくる。信濃国を対象とした時には、猿投窯はあまりも遠いのである。東山道に沿っており、なお、より近い東濃窯の生産が拡大するのは当然である。信濃国では、猿投窯製品は、初期の製品が限られた遺跡に集中して出土するのに対し、東濃窯の製品は、ほとんど全域から出土することもそれを物語っている。この頃には、灰釉陶器は猿投窯の特産品ではなく、むしろ東濃窯がそれに代わろうとしていたのである。

木曽路の開発は、東濃窯の灰釉陶器が信濃国へ拡大する過程と軌を一にしている。信濃の大坂（神坂峠）を経由せず信濃国府へ直行する木曽路は、東濃窯の製品運搬にとっては非常に便利であった。それによって信濃国での灰釉陶器の需要が増大し、東濃窯を一層発展させたのである。

7. おわりに

猿投窯は、古代における高級陶器としての緑釉陶器や灰釉陶器を生産し、次第に大量生産の方向に進み、やがて山茶碗と呼ばれる日常食器の生産に転換しながらも、数百年にわたって最先端の窯業を維持してきた。その成立については、当時の権力者による保護や育成があったことは確かであるが、数百年にわたり、我国最大規模の窯業地を形成してきたのは、その商業活動によるものであろう。特に、東海地方から関東地方にかけての広い地域に大量に出土する灰釉陶器は、その流通が貢納的性格によるものではなく、商業的性格をもっていることを示している。しかし、このことを明らかにすることはきわめて困難である。なかでも、その流通については、解明が最も遅れている分野である。しかし、最近の考古学的調査では、集落跡の性格も明らかにされつつ

あり、流通やそれに伴う商業活動も、いずれは明確になってくるものとおもわれる。こうしたことを考慮しつつ、猿投窯の製品流通について考えてみた。猿投窯の灰釉陶器は、産地比定が容易であることから、その分布状況は明らかとなるが、流通経路についてはまだよく分らないことが多い。しかし、古代の窯業のあり方を知る上で、猿投窯製品の流通を解明することはきわめて重要である。